

アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

10

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「カナダの町」

(2011年 技法：紙、鉛筆、色鉛筆、油性ボールペン、水性ペン H546 mm×L778 mm)

撮影：大西暢夫

コンクリートに咲く花

軽井沢病院総合診療科 医長／東京大学先端科学技術研究センター 客員研究員／
東北芸術工科大学 客員教授 (山形ビエンナーレ 2020 芸術監督)

稲葉俊郎

小学生の時、地球の声が聞こえてきて
外に出られなくなったことがある。それは
幼少期の記憶だったのか白昼夢なのか
は定かではない。地球がコンクリートに
埋め尽くされてしまい、地球が息ができ
ずに窒息しそうで叫んでいた。地球や土。
そこから漏れ出る得体のしれない叫びが
自分を飲み込み、外に出られなくなった
時期があった。

両親は我が子に何が起きているのか
さっぱり分からなかっただろう。ただ、
子どもという存在は、大人が思っている
以上に地球や宇宙と一対一で対峙してい
るのではないだろうか。多くの人が思い
出せないだけで。

どんなに地球がコンクリートで覆われ
ようとも、コンクリートの割れ目から一
輪の花が美しく咲いているのを見ると感
動する。そして、その時に必ずアール・
ブリュットの絵や作品のことを思う。

人工的な空間で埋め尽くされた世界の
中で、常識や思い込みという堅い意識の
割れ目から、生命がほとばしるように花
が咲く。孤高で力強く、孤独だが圧倒的
な自由。押し潰そうとしてもほとばしり、
溢れ出て来るもの。どんな場でも育ち、
適切な場さえあればさらに豊かに膨らむ
もの。それは「いのち」そのものを光景
として目撃し、体験しているのではない
だろうか。

今月の作家

古久保憲満

Norimitsu KOKUBO

1995年生まれ／滋賀県在住

創作は小学校に通い始めた頃から
はじまる。彼はこの世界（社会）の
形に関心があり、インターネットやテレ
ビ、歴史の本、旅先で撮った写真など
から自分が描きたい題材や情報を
集め、紙面に描き込んでいく。国内外
での出展のほか、彼を追いかけたド
キュメンタリー映画『描きたい、が止ま
らない』（2019年）が製作され紹介さ
れている。（解説：小林瑞恵）

企画協力：NPO 法人キャンサーリボンズ
「サンクスナース」プロジェクト